

# 子育てを通じた親の成長と 親の成長に関連する要因についての展望

村 本 茉 由

## 問 題・目 的

これまで親についての心理学的研究は、主に発達心理学の分野においてなされてきた。それらの研究では親は子どもの発達における環境要因の一つと考えられ（柏木，1995）、子どもに対して親がどのような影響を与えるのかという側面でしか考えられてこなかった。

柏木（1995）によって、親が子供の成長と共に自分自身も変化することが明らかとなってから、親の成長に関する研究は行われている。しかし、親の成長に関する心理学研究を網羅したものは少ない。

平成30年度の出生数は91万8397人と過去最少の値を示していること（厚生労働省，2019）、また、子どもがいない成人が25%いるという結果が得られていること（国民性調査，2013）から、人生において親という役割を持つことなく生涯を終える人の多さを窺い知れる。しかし、その一方で、内閣府（2014）が行った調査では、未婚者では将来子どもが欲しいと考えている人がほとんどであったという結果も得られている。このように、少子化は進みながらも、現在もなお子どもを欲しいと考えている人、つまり親になろうと考えている人が多いと考えられる。こうした現代社会だからこそ、親となることで得られる特別な経験とは何であるのか、またそれが人にもたらすのかについて検討することの意義はあるのではないだろうか。

子育てというのはゴールが見えにくく、また、周囲に相談出来る人がいなければ自分の殻に閉じこもってしまうことも多いだろう。厚生労働省（2002）の調査からは、自分で自由に過ごす時間が取れなくなり、精神的にゆとりを失っていく様子が窺える。本研究で親の成長について取り上げ、先行研究をレビューすることによって、親の成長とは何であるのかについて明らかにする。親の成長とはどのようなものであるのかを明らかにすることによって、子育てに対するポジティブなイメージを抱くことが出来れば、子育てをする親、また、これから子育てをしようとする者への一助に繋がると考えられる。

本研究では現在までに公刊されている親の発達について論文を整理していく。そして、親の成長がどのようなものであるのかについて整理して明らかにすることを目的とする。

それらを明らかにするために、以下を行う。

1. 親の成長に関する論文を整理する。
2. 親の成長に関連している要因を整理する。

## 方 法

本稿では、CiNiiを用いて「親」「成長」「心理学」をキーワードとして、2019年5月～12月に検索を行った。また、発達心理学研究・教育心理学研究に掲載されている「親の成長」をテーマとした論文もレビューの対象とした。このうち、「親の成長」のテーマに即していないものについては除いた。

## 結 果

本研究でレビューの対象とした論文は、CiNiiで「親」「成長」「心理学」をキーワードにして検索したもの、

著者	発行年	タイトル
柏木恵子・若松素子	1994	「親となる」ことによる人格発達・生涯発達の視点から親を研究する試み
柏木恵子	1995	歩行開始期における母子の共発達・子供の反抗・自己主張への母親の適応過程の検討
目良秋子・柏木恵子	1998	障害児をもつ親の人格発達一価値観の再構築とその要因一
小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓	1998	父親になる意識の形成過程
熊谷朋子・谷村厚子・三浦咲	2000	知的障害児の母親における育児負担感と自己成長感について～ソーシャルサポートとの関連から～
西田裕紀子	2000	成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究
坂上裕子	2003	歩行初期における母子の共発達一子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討一
徳田治子	2004	ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ:生涯発達の視点から
松元民子	2006	障害児の母親の自己成長感とアイデンティティに関する研究,リハビリテーション心理学研究
森下葉子	2006	父親になることによる発達とそれに関わる要因,発達心理学研究
兼田祐美・岡本祐子	2007	ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究
小武内行雄	2011	しつけを通じた親の「悩み」「成長」と子供におけるしつけ認知との関連
坂本莉恵・一門恵子	2011	自閉性障害児を複数にもつ母親の心理変容構築
山根隆宏	2012	高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ:人生への意味づけと障害の捉え方との関連
大島聖美	2013	中年期の子育て体験による成長の構造:成功と失敗の主観的語りから
高橋有香	2013	乳幼児をもつ働く母親の心理的成長のプロセス:自由記述の質的検討
西田裕紀子	2014	成人期・老年期における発達研究の動向,教育心理学年報
荒川恵美子・中村真理	2015	NICUに入院した子供の父親における心理的プロセス
坂元友美	2017	養育体験を通じた母親の生き方一M-GTAを用いた成長の構造についての考察一
澤田忠幸	2019	育児期父親の幸福感・育児関与と生活スタイル・妻からの役割期待との関連
多喜代健吾・北宮千秋	2019	父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響

図 1 レビュー論文一覧

及び、発達心理学研究・教育心理学研究に掲載されている「親の成長」をテーマとした論文である。対象の論文は、計 21 件あった (図 1)。

### 親としての成長とは

親としての成長に関するこれまでの研究の中では、その変化、つまり成長については、例えば日常生活における対応の細やかな変化から、人格的な成長まで非常にバラつきが大きい印象を受ける。細やかな対応の変化までも親としての成長に含むのかについては今後議論が必要であるように思うが、しかし、こうした小さな積み重ねによって人格的な成長が訪れることも事実であろう。また、親としての成長に関する研究も未だ途上段階であり、本研究では日常生活における対応の細やかな変化も含め、親としての成長と定義する。

### 親としての成長過程

子どもが産まれても、これまで子育てで経験のない者にとって子育ては困難の連続であろうと考えられる。そうした成人が、いかにして「親」となっていくのだろうか。乳幼児期において、第一次反抗期が訪れた子どもに対し、親はそれまでとは異なり、躰に関心が向き始める (坂上, 2003)。こうした子どもの成長に伴って親は何かしらの対応の変化を求められるだろう。そうした際に困難と直面しつつも、それを乗り越えて親は子どもと接していかなければならない。こうした親の経験や心理的プロセスのことを、本研究では成長の過程と捉える。まず、ここでは、親としての成長の過程に注目して検討する。

坂元 (2017) は、母親が子育てというライフイベントを通じて何を体験し、アイデンティティがどのように変化したのかについて検討した。母親は子育ての中で様々な困難に直面する。その時に、自分自身が描く母親像とのギャップに苦しむ。しかし、こうした対応を繰り返すことによって徐々に子供への愛情を感じるようになり、子育ての対応も変化していくという。また、子どもの変化に対応して、自分自身の変化を実感し、子育てを肯定的に捉えるようになることということが示されている。

では、こうした困難を乗り越え、親はどのようなプロセスを経て適応していくものなのであろうか。坂上 (2003) は歩行開始期における子どもの反抗や自己主張に対する母親の適応過程について検討した。母親は特に怒

る・突き放す・強制する・叩くなどの対応を取った母親は子どもの視点に立って後から自分の行動について考え直していた。また、それ以外の対応を取った際にも、子どもの視点から、あるいは子どもにとっての躰の担い手あるいは管理者という立場から、自分が取った言動を考え直すこともあった。このように、自分本位な行動を取ったり、反対に子どもを甘やかす行動を取った際には母親は後から別の視点に立って考え直すということが示されている。

それでは、こうした様々な葛藤を乗り越え、子どもが巣立つ時に親は何を感じるのだろうか。兼田・岡本(2006)では、子どもの巣立ちと親のアイデンティティ変容の特徴、またその変化のプロセスについて検討している。親は子育て中の様々な問題を乗り越える中で徐々に子供への信頼感を得るようになり、子供の成長を実感するようになる。こうした子供の成長は巣立ちの予感になり、この予感が今後の自分の人生について考えるきっかけとなる。また、子供が実際に巣立ったあとは自分らしい生き方を模索したり、自分らしい生き方や生きがいを見つけていくようになっていくという。

大島(2013)は、成人初期の子どもを持つ中年期の母親が子育てをどのように捉えているのかについて検討した。母親はこれまでの経験の中で母親の理想像を作りだし、その理想像に基づいて子どもの意を尊重して子育てをしようとするも、つい自分本位な関わりをしてしまう。しかし、そのような時にも周りの人に助けをもらうことにより、子どもから学ぶという体験を通して、子どもと一緒に成長する自分を感じ、子どもを離れて見守り、心理的ゆとりを獲得するということが示されている。

岡本(2013)では、乳幼児期の子どもをもつ働く母親の心理的成長のプロセスについて検討し、母親は仕事と子育ての両立の難しさに直面し、こうした状況への適応を模索する段階を経て、母親は徐々に自分自身の変化を実感するようになるということが示された。

こうした、子育て上の様々な困難を乗り越えていく中で親が子どもへの信頼感や成長を感じ、関係性が変化していく中で徐々に自らの変化を実感していくという親の成長の過程は今回対象とした論文のほとんどでみられた(坂上, 2003; 大島, 2013; 兼田, 2006)。このように、親としての成長の過程において、多くの子育て上の問題にぶつかりながらも、それに対して対処法を考えていくようである。また、子どもへの信頼感や、子ども自身の成長を感じることも親として成長する過程において重要なことといえるだろう。

## 親の人格的成長

このように、親としての成長には子どもとの衝突を繰り返し、育児のやり方について悩んでは修正を繰り返していくことによって、子ども自身を受容し、そうしてやがて自身の成長に繋げていくという過程があるということが示された。それでは、こうした過程を経て得られる親としての成長とは、いったい何なのだろうか。

先述した親の心理的成長のプロセスに関する研究でも、親としての成長について触れたものがある。大島(2013)では、利他心や視野の広がり、自分自身の生き方を意識することができるようになること、高橋(2013)では仕事と育児の両立によって、母親は自己認識の変化や対人関係の変化が生じるようになるという。

これらの母親の成長に関する心理的プロセスに着目した研究は、どちらも母親に対してインタビューを行っている。一方、こうした心理的プロセスを経て母親にどのような成長がもたらされたかについて検討した研究は、質問紙調査を行い、因子構造を明らかにした物が多かった。

柏木・若松(1994)は3~5歳の幼児をもつ親を対象として、「親となる」ことによってどのような変化が生じたのかを測定するための尺度を作成した。その結果、親になる前と比べて特に変化したと感じたのは「運命・信仰、伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」の3つであり、また、こうした親の成長に対して、職業を持たない母親の方が親になってからの変化が大きいという結果が示されている。父親及び有職の母親では、これらの面は子育てではなく仕事で様々な経験をする中で成長をしているのではないかと考えられている。

西田(2000)では、幅広い年代の成人女性の多様なライフスタイルについて、心理的 well-being との関連から検討している。その結果、母親としての役割達成感は若い年代ほど高いという結果が得られている。また、25~34歳では、母親としての役割達成感と「人生における目的」、「自己受容」との関連が見られた。35~44歳では「人格的成長」、「人生における目的」、「積極的な他者関係」と関連が見られた。一方、45歳~54歳、55~65歳では関連が見られなかったことから、年代を経るにつれて母親としての役割が終わっていくことを示していると考え

えられている。

父親の発達を取り上げた研究は少ないものの、幾つか見られた。森下 (2006) では、子どもの自分に対する態度を肯定的に捉えている父親ほど育児への関心を持ち、それによって自分の人生を顧みたり、責任感や周囲の環境に対する関心が高まるという結果が示されている。

また、父親が親になるまでの心理的プロセスについて検討した研究もある。小野寺・青木・小山 (1998) や澤田 (2019)、多喜代・北宮 (2019) によって、一家の大黒柱としての責任感を抱くことによって父親は親としての自覚を抱き始めると示されている。また、父親自身の主観的幸福感には妻からの育児における役割期待が影響することも明らかとなっている。

これらの研究では、親となることによって視野が広がり、また、受容的に物事を受け止められるようになるという、世間一般における人間としての温かみや優しさのようなものが育つということが示されているのではないかと考えられる。それから、子育てを通じて自分の人生を改めて考えたり、人生設計について再度考えなおすことも示されている。子どもの成長を通じて、親自身もこのような成長をしていると考えられるだろう。

これらの研究のほとんどが母親を対象としたものであり、両親を対象に研究を行っている研究は非常に少ない。それでは育児を通じた成長は職を持つことの多いであろう父親にとって全く不必要なものであるかということ、そうではないと考えられる。澤田 (2019) では、仕事を優先した生き方が必ずしも父親の幸せには繋がらないということが示されている。また、妻から仕事と育児両方の役割を期待されている父親が、仕事のみ、育児のみを期待されている父親よりも主観的幸福感が高いという結果が得られている。こうした結果から育児が父親の人生を豊かにすることに少なからず影響することが考えられ、父親にとっても育児というものがプラスに働くのではないかと考えられる。

### 障害を持つ子どもを育てる親の成長

障害を持つ親についての研究は、主に障害受容に関する研究が主だという (山根, 2012)。障害受容研究では、子どもの障害の告知という経験をした母親・父親が、いかにしてその危機を脱して、子どもの障害を受容していくかについて検討されてきた (山根, 2012)。障害児を持つ親の成長が障害受容のみであるとは考えにくい。しかし、先述した親としての成長が何であるのかを述べた項において「受容」というキーワードが出てくることは多く、それだけ親の成長において子どもを受容することは重要であり、その重要な事柄が、障害を持つ子どもの場合は難しくなることが予想される。こうした背景を鑑み、この研究では障害児を持つ親の成長の一過程として障害受容を取り上げたい。

それでは、障害を持つ子どもを育てる親と、健常児を育てる親ではどのような違いがあるのでしょうか。目良・柏木 (1998) は、障害児を持つ親を対象に、障害児をもつことは親の人格発達に独自の影響を与えるのかについて検討した。その結果、健常児の親よりも障害をもつ子供の親の方が、より価値観に関わらず柔軟な視点で子供と接することが出来るようになったという結果が得られた。

松元 (2006) では、様々な障害をもつ中高生の母親の自己成長感が、19 歳以上の子どもを持つ母親の自己成長感よりも有意に高いことが示された。ここから、子どもが学校を卒業し社会に出ることで、母親は自己の成長よりも安定感を感じるようになることが推測されている。また、母親の自己成長感は子どもの成長の大きさにも影響を受け、子どもの成長と並行して自らの成長感が育成されるとも考えられる。母親は子どもの障害の種類に関係なく自分の成長を感じていると思われる。

山根 (2012) では、高機能広汎性障害児・者の母親が子どもを育てる経験を人生にいかんにか意味づけているのかについて研究を行なった。その結果、子どもの障害に対する「成長・肯定型」「両価値型」「消極的肯定型」「自己親和型」「見切れ型」「希薄型」という 6 つの意味づけの類型を行なった。「成長・肯定型」や「消極的肯定型」の母親は子供の障害特性を受け入れ、ありのままを受け入れることが出来ている。だが、それ以外の母親たちは、障害を受け入れられなかったり、子供の障害を否定的に捉えていた。

坂本・一門 (2011) では、複数の自閉症障害児をもつ母親の思いを検討している。その結果、一人目の診断時の方がショックが大きいタイプ、二人目の方がショックが大きいタイプ、診断時の思いにほとんど違いがないタイプ、兄弟が同時に診断されたタイプに分けられた。診断時の思いについて、一人目の時は「放心」「自責の念の

消失」「前向き」に、二人目以上の時は「絶望」「苦しい現実受容」「平静」「自責の念の再出」などのカテゴリーが抽出された。複数の自閉性障害児をもって良かった点について「人間関係の拡がり」「自己の成長」「子どもの成長の喜び」などの回答が得られた。

### 3-2 親としての成長に関わる要因

#### 育児不安

これまで上げた論文の中にも幾つか育児不安が親としての成長に影響を与えているという結果が示されているものもある（坂元，2009；柏木，1995）。親の成長の過程においても、育児に関する悩み・葛藤を抱えている母親たちが徐々に自分自身及び子どもを受け入れ、成長することが示唆されている。このことから、育児不安と育児を通じた親の成長には関連があると考えられる。

小武内（2013）ではしつけに関する親としての悩みと成長が子どものしつけ評価とどのように関係するかを検討した。その結果、まず、父親では家族との教育方針のズレや子どもに対するアンビバレントな気持ちと、親の受容的態度に負の相関があり、子どもとどのように接したらいいのか分からないという悩みと、親の成長に関連がみられた。また、母親では悩み尺度のすべての因子と成長尺度の「受容的態度」の間に負の相関が認められた。また、「家族成員間葛藤」と「自己の再編」との間に正の相関が認められた。

徳田（2004）では、子育ての意味付けについて5つのパターンを見出し、検討している。育児中心の生活への負担感・制約感を感じている母親は、子育ての経験を成長出来る機会と捉えていることが示唆されている。将来については、子育て中心の生活の延長を望んでおり、ライフコース上での葛藤は語られない。一方で、現在は育児中心の生活について肯定的評価を感じている母親は、子育てが終わった後の自分としての生き方に関して、不安や葛藤を語っている。

このように、育児不安は親としての成長に対して影響を与えているという結果が得られている。親としての成長過程において、親は子どもとどのように接していけばよいのかと、悩みながら対応を考えていくということが示されており、日常生活の中で子どもとの関わりを考えることは親としての成長において必要な要素であると考えられる。

しかし、その一方、強すぎる育児不安は親としての成長を阻害するとも考えられる。小武内（2013）では、家庭の中での葛藤の多い群、子どもとの関わりが一方的である群は、成長得点が低いという結果が得られている。このことから、家族からのサポートが少ないこと、また子どもの気持ちを尊重出来ない関わりは親としての成長を阻害することが考えられている。

#### ソーシャルサポート

ソーシャルサポートは育児に関する心理的な負担や不安感を低減させる要因として考えられている（渡邊・城月・伊東・藤森，2017）。

先述した親の成長の過程に関する研究においても、ソーシャルサポートを関連する要因と考えているものは多く、坂元（2017）や大島（2013）において身近な人たちからのサポートが親の心理的なゆとりにつながるのではないかと考えられている。

それでは親の人格的な成長とソーシャルサポートにはどのような関連があるのだろうか。荒川・中村（2015）は、妻が妊娠出産し子どもがNICU（新生児特定集中治療室）に入院するという経験を経て日常生活を送っていくこととなる父親の心理的变化を研究した。ここでは、子どもがNICUに入院するという緊迫感の中で、予定日よりもはるかに早く突然出産となるという危機的な状態を経験した父親を、職場の人たちや家族などが心理的に支えてくれることが、父親であるという実感を持つことに繋がるという結果が示された。

熊倉・谷村・三浦（2000）では、知的障害のある子どもの子育ての中でソーシャルサポートが自己成長感にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。その結果、日常的サポートによって人格的に成熟し、他人への思いやりなどを抱けるようになること、ソーシャルサポート高群は低群に比べ、自己成長感が高いという結果が得られている。このことから、自分は他者から支えられているという感覚を持つ母親ほど、育児の中で起こる感情をポジティブな方向に関連づけることが出来るのではないかと考えられる。

このように、障害を持つ子どもを育てる母親にとってもソーシャルサポートは大切であることが示されている。

それでは、健常児を持つ母親の場合はどうだろうか。

高橋(2013)では、乳幼児をもつ母親の心理的成長のプロセスについて検討した。その研究において、母親が子どもを保育所に預けることで心にゆとりが出来、自分らしさを取り戻し、また、子育てを客観視出来るようになるという。こうした外部のサポート源を利用することが出来れば、母親も自分だけが育児をしなければならない等と思うことなく、一歩引いたところから自分の子育てについて考えられるようになるのではないかと考えられる。

小武内(2011)では、しつけに関する悩みや成長の関連について検討している。その結果、父親・母親共には「家族成員間葛藤」と「受容的態度」の間に弱い相関がみられた。このことから、夫婦間で子育てをうまく分担出来ていなかったり、しつけ観にズレがある場合、受容的になったと感じられにくいという結果が伺える。

このように、親が育児を通じて成長をしていく中で、周囲からの手助けというものは非常に重要であることが伺える。このことから、ソーシャルサポートを得ることによって親は心理的なゆとりを獲得することが出来るようになるのではないかと考えられる。また、ソーシャルサポートを多く獲得していると感じている親ほど、自分自身が子育てを通じて成長できたと感じるという結果も得られており(熊倉・谷村・三浦, 2000)、心理的なゆとりを獲得することによって子どものことだけでなく、自分自身のことも客観的に見つめることが出来るようになるのではないかと考えられる。

その一方で、ソーシャルサポートを上手く得ることが出来なかった場合、自分自身が受容的になったと考えにくくなるという結果も得られている(小武内, 2011)。受容的態度に関しては、育児を通じて成長した部分として捉えている親が多く、子育ての中で比較的感じやすい側面なのではないかと考えられる。このような多くの親が比較的経験しやすい部分を感じられにくくなるということは、ソーシャルサポートが得られないことによって自分自身の心のゆとりがなくなるためではないかと考えられる。

## 考 察

本稿では育児を通じた親の成長をテーマにした論文、また、親の成長にはどのような要因が関わっているのかについて整理をした。その際、親の成長について、心理的な成長プロセスと人格的成長の2つに分けて検討を行った。

### 4-1 親の成長の過程について

親の心理的成長には、以下のようなプロセスが考えられる(図2)。まず、親は子育ての中で様々な困難と直面する。こうした困難を抱えた親にとって、外部からの支援というものは非常に大きく働くだらう。ソーシャルサポートによって、親は精神的な安定と子育ての安心感を得ることが出来るようになる(高橋, 2013)。しかし、こうしたソーシャルサポートを得ることが出来なかった場合、心理的なゆとりを得ることが出来ず自分本位な関わりをしてしまうことになる(坂元, 2017)。だが、こうしたソーシャルサポートをその先得ることが出来るか、もしくは自分自身の子どもに対する関わりを考え直すことが出来れば親の関わりは変わっていく。また、子どもとの関わりの中で、親は子どもに対して何かを指導するというだけでなく、子どもから何かを学ぶという体験をする(大島, 2013)。こうした学びと日々の子どもの関わりを何度も繰り返していくと、やがて子どもを一歩引いたところから見ること(大島, 2013)、また、親子の関係の変化を認識することが出来るようになっていく(坂元, 2017)。こうして、母親は自分自身の変化に気づくようになる(坂元, 2017)。

このような親の成長過程では、家族からのサポートなども重要だが、親自身が子どもからの学びを感じ取ること、また、親が子どもと一定の距離をもって接することが重要なのではないかと考えられる。高橋(2013)においても、保育所に預けることによって、子どもと適切な距離を保ち、子どもをかわいいと思えるようになったことが示されている。子どもとの距離が密着することによって、子どもに対して怒りを覚えることもあるかもしれない。こうした適切な距離感を保つことが、子育てにおいても重要なのではないかと考えられるのではないだろうか。

子どもからの学びや子どもへの信頼感が親としての成長に影響を与えるということも示唆されている(兼田・

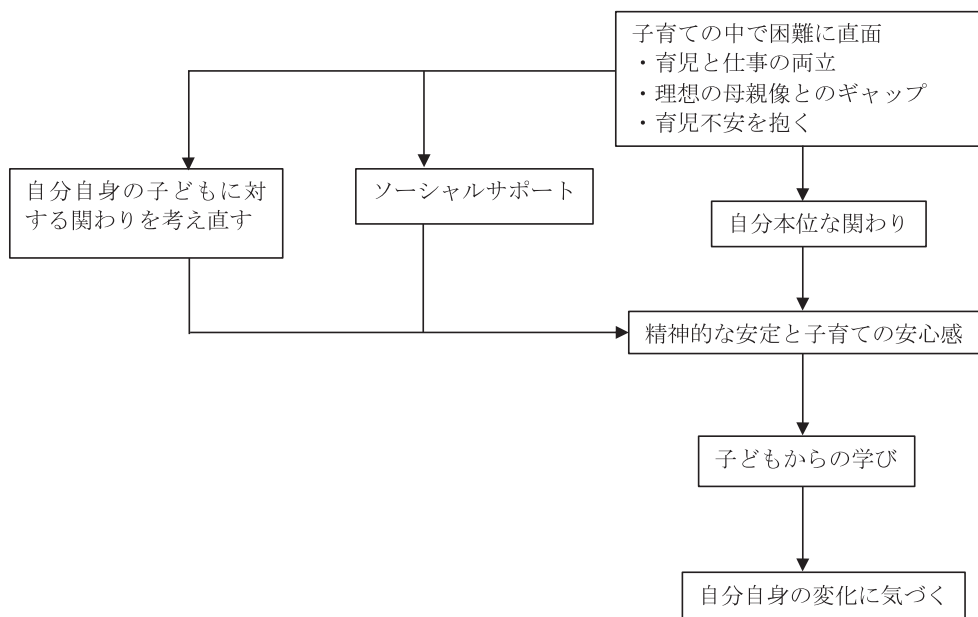


図2 親の成長の過程について

岡本, 2007; 大島, 2013)。服部 (2011) では, 成人中期の核として「世話をすること」が挙げられている。服部 (2011) では「世話」には相互性という意味合いも含まれており, 親と子の相互の働きかけが存在すると考えられている。このような相互作用は一朝一夕に出来上がるものではなく, 親が子どものことについてよく知り, 経験を重ねていく中で出来上がるものであろう。親と子どもの相互作用が出来上がるまでには子どもからの学びが非常に重要であり, それが親の成長にも影響を与えるのであろう。

#### 4-2 親の人格的成長

親の人格的成長に関する論文では, 視野の広がりや物事を受容的に受け止められるようになったこと, 育児に纏わる困難を乗り越えたことによって自己肯定感を感じられるようになることが親自身の成長として挙げられていた。先述した通り, 親としての成長とは人間としての温かみ, 懐の広さといえるのではないかと考えられる。こうした温かみは, 前述した「世話をすること」という行為の中で生まれるものであろうと推測出来る。

また, 子育ての中で自分自身を受け入れることが出来るようになるということも考えられる (柏木・若松, 1994; 西田, 2000)。育児の中では様々な困難が生じるため, 何事も完璧にこなすことは難しい。高橋 (2013) では, 乳幼児を持つ母親は育児と仕事の両立において, どちらも中途半端になってしまうことに悩むという。しかし, こうした困難な状況の中で, 理想と現実異なることを受け入れ, 完璧にこなすことは不可能であることを悟り, 自分自身を受け入れることが出来るようになるという。

子の巣立ちによって, これまで育児に励んできた母親はこれから何のために生きていけばいいのか, 自分は何者なのかということをもう一度考えるという (兼田・岡本, 2006)。子育てが終わる頃は, いわゆる中年の危機と呼ばれるアイデンティティの拡散が生じやすい時期でもありと考えられるが, 子育てが終わる頃, これまで子どものために時間を費やしてきた親が改めて自分自身について考えるのではないだろうか。

#### 4-3 今後の課題について

以下, 親の成長に関する研究の課題を述べる。

第一に, 対象者についてである。本研究でレビューの対象となった論文のほとんどが母親を対象とした研究であり, 父親を対象としたものは非常に少なかった。日本はいまだ子育ては女性がするものという意識が強く, そうしたことから, 父親と育児を結び付けた研究が少なかったのかもしれない。しかし, 女性も社会進出し, 働き始めるようになった昨今, 父親が育児に参加することの意味についても一度考える必要があるのではないだろうか。

2つ目は、親としての成長について、親自身の元々の性格との関連を検討した研究が少なかったことである。育児不安などは不安への感受性にも起因するのかもしれないが、他の性格特性について触れられた研究はほとんど見受けられなかった。親としての成長には、先述した通り受容的な態度や広い視野を持つことなどが挙げられている。しかし、こうした点に元々の性格特性が関連している可能性は否定できない。

親の成長に関する研究はまだ途上段階にあるし、成人中期～後期の発達に関しても研究はさほど進んではいない。しかし、少子化が進む昨今において、育児による成長という親自身に還元されるプラスの側面を考えていくことは非常に重要であるだろう。

#### 引用文献

- 荒川恵美子・中村真理 (2015). NICU に入院した子どもの父親における心理的プロセス. 12(1), 32-41.
- 服部祥子 (2011). 生涯人間発達論人間への深い理解と愛情を育むために. 医学書院.
- 広田照幸 (2006). 子育て・しつけ, 日本図書センター
- 兼田祐美・岡本祐子 (2007) ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究. 広島大学心理学研究. 7, 187-206.
- 柏木恵子 (1995). 歩行開始期における母子の共発達: 子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討. 発達心理学研究. 14, 257-271.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究. 5, 72-83.
- 厚生労働省 (2002).
- 厚生労働省 (2018). 平成 29 年度 (2017) 人口動態統計 (確定数) の概況 (2018. 9. 7.)  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei17/index.html> (2019.11.11 取得)
- 熊谷朋子・谷村厚子・三浦咲 (2000). 知的障害児の母親における育児負担感と自己成長感について～ソーシャルサポートとの関連から～. 明治学院大学文学研究科, 5, 1-15.
- 松本伊智朗 (2013). 子ども虐待と家族「重なり合う不利」と社会的支援. 株式会社明石書店.
- 松元民子 (2006). 障害児の母親の自己成長感とアイデンティティに関する研究, リハビリテーション心理学研究. 33(1), 29-40.
- 目良秋子・柏木恵子 (1998). 障害児をもつ親の人格発達－価値観の再構築とその要因－. 13, 43-51.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究. 17(2), 182-192.
- 内閣府 (2014). 平成 26 年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書 (2015.3)  
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/pdf/2-1.pdf> (2019.11.11)
- 西田裕紀子 (2014). 成人期・老年期における発達研究の動向. 教育心理学年報. 53, 25-36.
- 小武内行雄 (2011). しつけを通じた親の「悩み」「成長」と子どもにおけるしつけ認知との関連. 教育心理学. 59, 414-426.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. 教育心理学研究. 48, 433-443.
- 西澤哲 (1994). 子どもの虐待－子どもと家族への治療的アプローチ. 誠心書房
- 坂上裕子 (2003). 歩行初期における母子の共発達－子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討－. 発達心理学研究. 14, 257-271.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998). 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究 9, 121-130.
- 大島聖美 (2013). 中年期の子育て体験による成長の構造: 成功と失敗の主観的語りから. 発達心理学研究. 24, 22-32.
- 坂本莉恵・一門恵子 (2011). 自閉性障害児を複数にもつ母親の心理変容構造. 応用障害心理学研究. 10, 49-60.
- 坂元友美 (2017). 養育体験を通じた母親の生き方－M-GTA を用いた成長の構造についての考察－. 追手門学院大学心理学論集. 25, 37-50.
- 高橋有香 (2013). 乳幼児をもつ働く母親の心理的成長のプロセス: 自由記述の質的検討. 生涯発達心理学研究. 5, 73-85.
- 多喜代健吾・北宮千秋 (2019). 父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響. 日本看護研究会雑誌. 42(4), 763-773.
- 徳田治子 (2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から. 発達心理学研究. 15(1), 13-26.
- 氏家達夫 (1995). 乳幼児と親の発達. 金子書房
- 山根隆宏 (2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ: 人生への意味づけと障害の捉え方との関連. 発達心理学研究 23, 145-157.
- 吉田弘道 (2012). 育児不安研究の現状と課題. 専修人間科学論集. 2(1), 1-8.